

# 井上円了に関する研究史

三浦 節夫

## 1. 先行研究

井上円了は幕末に生まれ、大正に逝去したが、明治20年前後から社会的活躍し、東洋大学（前身は哲学館）の創立、哲学の伝道、仏教の近代化の先駆者、妖怪学の提唱、社会教育（修身教会運動）の展開、哲学堂の創設など、多岐にわたる業績を残した。

その井上円了に関する研究史として、われわれ東洋大学が本格的に研究する前に、各分野の先行研究があった。主な分野と研究者をあげると、つぎのようになる。

近代日本哲学史——船山信一氏

近代日本仏教史——吉田久一氏、柏原祐泉氏

近代日本思想史——家永三郎氏、山崎正一氏

近代日本科学史——板倉聖宣氏

こういう研究者などが、それぞれの専門分野からの井上円了を部分的に扱っていた。この中で、社会的な評価としてとりわけ影響が強かったと言われているのが家永三郎氏である。家永氏は、井上哲次郎が教育勅語から国家主義への教化を行なったことで有名であるが、その井上哲次郎が官の立場で行なったことを、民の立場でそれを行ったのが井上円了だと、こういう位置付けをした。

吉田久一氏も、ある意味では、家永氏と同じような、国家主義との関係で井上円了を位置づけた。吉田氏は『近代日本仏教史』の研究の中で、仏教の近代化という観点から井上円了先生を取り上げてはいない。国家主義、国粋主義、そういう枠組みで数人の中の一人として取り上げていた。

最近の近代日本仏教史の研究では、井上円了が仏教の本質を求めた初めての人物と位置づけている。田村晃祐氏や末木文美士氏の著書ではそういう取り上げ方である。研究の時間が経過することによって、その国家主義との関係というようなのが薄れてきている。井上円了の業績の見直しが、時代や社会の進展にともなって、歴史的な位置付けの違いが起ってきている。

さて、東洋大学にも先行研究がなかったのかといえば、「学祖研究室」というものがあつた（天野才八「学祖研究室について」『井上円了研究』7号、153～159頁参照）。昭和31年に設置され、責任者は宮西一積氏（日本思想史）、顧問は井上円了の長男の玄一氏、その他に助手2名という組織であつた。この学祖研究室の目的は、「翌32年の70周年記念事業のために設置されたもので、その目的の一つは井上円了先生の研究をして東洋大学の今後を検討すること、もう一つは記念事業を盛大にやつてそれを契機に新しい事業を企画・推進すること」であつた。2ヵ月に1回の研究会を行なつてこと、井上家からの資料（哲学堂所蔵）を調査することであつた。その成果は、柳井正夫編『学祖井上円了研究と東洋大学学術研究の一斑』にまとめられていると言われている。昭和34年には学祖研究は大学付属の東洋学研究所に移行した。助手をしていた天野氏は「学祖研究室は当初は意欲的で勢いもありましたが、やがてしりすほみになっていったというのが当時の状況ではなかつたかと思ひます。」また「学祖研究室時代というのは客観研究という段階ではなく、学祖への関心の種を蒔こうとしたものであつたと思ひます。……70周年記念事業のために設立されたもので……学祖に関する研究というにはほど遠かつたように思ひます。」と述べている。

このように、井上円了の多岐にわたる業績に関する先行研究は、各分野の部分としてのものはあつても、全体像

を含むまとまった研究というのはなかった。

## 2. 井上円了研究会

昭和 53 (1978) 年に、東洋大学は井上円了記念学術振興基金を設定し、その果実である 1,000 万円を井上円了研究に当てることを決定した。これから有志による本格的な井上円了研究が始まった。募集に応じて 3 つの部会が設定された (この他に、「井上円了の書」研究グループも設定され、5 冊の研究成果を発表している)。各部会とテーマは、インド哲学科中心の第 1 部会は「井上円了の学理思想」、哲学などの関係者による第 2 部会は「井上円了と西洋思想」、哲学と社会学の第 3 部会は「井上円了の思想と行動」であった。この 3 つの部会による研究は 10 年間にわたり行なわれた。結果からいえば、第 1 部会と第 2 部会は『井上円了の学理思想』『井上円了と西洋思想』というそれぞれ 1 冊ずつの成果にとどまった。私も所属した第 3 部会のみは、田中菊次郎、高木宏夫という歴代の部会長が、研究成果をまとめて、機関誌に公表するという方針を取ったので、後述するような出版物ができた。また、この第 3 部会では、円了研究の基礎資料を集め、さらに著書の整理 (これは図書館も独自に進めた)、そして現地調査を行なった。

第 3 部会による 10 年間の出版物とその内容はつぎのとおりである。

井上円了研究 1 号 (昭和 56 年)

田中菊次郎「円了と民衆」

世良民平「井上円了の人間像」

山内四郎「井上円了の学位に就いて」

針生清人「井上円了の哲学」

井上民雄「祖父 井上円了について」

「井上円了に関する郷土における調査報告」

井上円了研究 資料集 第 1 冊 (昭和 56 年)

雑誌『六合雑誌』『太陽』『国民の友』『日本人』における井上円了とその関係の論文や記事を復刻したもの。

井上円了研究 資料集 第 2 冊 (昭和 57 年)

井上円了『甫水論集』の復刻。

井上円了研究 資料集 第 3 冊 (昭和 57 年)

井上円了『円了講話集』の復刻

井上円了研究 2 号 (昭和 59 年)

飯島宗享「井上円了の「教育」理念序説」

小林忠秀「井上円了の思想」

田中菊次郎「政教社のナショナリズムと井上円了の「護国愛理」」

高橋統一「井上円了と河口慧海」

西山茂「井上円了と蓮門教」

田中菊次郎「南船北馬」現地調査覚書 (続編)

東洋大学第一期生佐々木正熙氏談「井上円了とその時代」

三浦節夫編「井上円了略年譜」

井上円了研究 3 号 (昭和 60 年)

北田耕也「井上円了の社会教育思想—研究の一視点」

松岡八郎「加藤弘之と井上円了—加藤弘之の前期政治思想との関連において」

三浦節夫編「調査報告 (5 編)」

井上民雄「『南船北馬集』第一六編の原稿について」

井上円了『南船北馬集』第一六編

井上円了研究 4 号 (昭和 61 年)

総合研究 井上円了の教育理念について  
高木宏夫「総合研究の経過と問題点」  
水沢清之「哲学館事件に関する世論」  
広畑一雄「明治の教育政策—公教育制度の成立過程」  
飯島宗享「基調報告」  
「総合討議」  
三浦節夫編「井上円了関係人物辞典」  
井上円了研究 5号（昭和61年）  
高木宏夫「井上円了の宗教観」  
吉田久一「明治後期の社会思想と哲学館」  
三浦節夫「井上円了の「護国愛理」の変化に関する中間報告」  
山内四郎「井上円了の学位に就いて」（訂補）  
三浦節夫編「井上円了関係書簡集（その一）」  
井上円了研究 6号（昭和61年）  
第2回総合討議「井上円了の教育理念—その思想と行動」  
田村晃祐「井上円了と真宗」  
丹野朝栄「戦前の私立大学の変遷—明治二十年以降「大学令」まで」

東洋大学井上円了研究会第三部会編『井上円了関係文献年表』（昭和62年）  
東洋大学井上円了研究会第三部会編『井上円了の思想と行動』（論文集）（昭和62年）  
このように、井上円了研究会第3部会では、基礎研究、個別研究、総合研究が取り組まれた。とくに『井上円了関係文献年表』という基礎的な文献目録については、前掲の板倉氏が「この目録により、東洋大学でも本格的な井上円了研究ができるようになった」と高く評価された。

また、これらの第3部会の出版物は、学内の教職員に配布され、創立者である井上円了に対する関心が少しずつ形成された。と同時に、これらの出版物は全国の大学・短大の図書館へ寄贈されて、今後の井上円了研究の拡大が期待された。

### 3 『井上円了の教育理念』

すでに述べたように、第3部会では哲学科の飯島氏が提起した「井上円了の教育理念」を中心に、個別の研究成果を集約しながら、一つの井上円了像を総合的な観点から研究して纏めることになった。この総合討議という形での研究は、2泊3日の合宿形式で取り組まれ、その録音を活字化して、編集する形で進める、という初めての試みであった。井上円了の全体像を、教育理念という形でつかむという総合研究は、3年間続けられた。それぞれの専門研究者が様々な角度から井上円了像を提起し、それを批評・検討した総合研究は研究史的にも初めてのことで、これによって井上円了に関する一定の共通理解ができました。それはちょうど昭和62年、東洋大学創立100周年の時期に重なった。

創立100周年には、色々な出版企画があり、その中の一つに「円了語録」という、井上円了の代表的な文章を集めようという部会と、『井上円了選集』の著作の部会があった。この部会に井上円了研究会を代表して高木氏が委員として参加していた。井上円了の語録集のようなものを現代表記なり、現代の言葉に書き換えて、解り易く配布しようという計画はなかなか進まなかった。そこで、高木氏は井上円了研究会第3部会の成果を踏まえて、「井上円了の教育理念」を新書版で書き下ろすという方針を提案した。この方針転換は委員会です承された。新書版で読みやすく、理解しやすいものに変えるという方針転換は創立記念式典まで7ヵ月という時点でのことであり、ある意味では大胆な切り替えであった。

そして、色々な事情があり、監修は高木氏が行ない、私が原稿を書くことに結局なった。ところが、正直に言えば、私は「東洋大学という大学をどう理解するか」「井上円了をどう理解するか」、という基本的な視点や結論を

持っていなかった。そういう執筆者の立場から考えると、2月に新書版に書き下ろすという方針転換し、創立100周年の記念式典が10月に予定され、記念式典に合わせて刊行するという事は、それまでの井上円了の研究史にまとまったモデルのない状況では、記念出版物として完成させることが至上命題であり、刊行失敗は許されず、時間的に厳しかったというのが当時の私の感想であった。しかも、井上円了の代表的著作を現代表記に直した『井上円了選集』の3巻を同時に編集・刊行する予定であった。

色々な経過があったが、『井上円了の教育理念』は記念式典までに刊行された。内容的にはつぎのような構成であった。

『井上円了の教育理念—新しい建学の精神をもとめて』

序—歴史はそのつど現在が作る

I 教育理念の形成過程

II 教育理念の発展

III 井上円了の教育理念

IV 座談会「これからの東洋大学の課題」

資料 井上円了略年譜

井上円了主要著作

あとがき

このように『井上円了の教育理念』という本は、創立期の哲学館の歴史と論理で構成されて、一方は、東洋大学の歴史であり、そこに井上円了の人となりや業績、それから、教育理念をまとめたものである。

また、別に取り組みされた『井上円了選集』は、すでに述べたように、井上円了の代表的な著作を現代表記版した。編集の実務は私が担当したが、なぜそうなったのかといえば、委員会の討議で、ある委員から明治時代の著作をリプリントしたのでは、現代人はとても読めないという提案があったからである。問題として、難解な漢字にルビを付けるのか、それとも、ひらがな化をして現代表記に直して読みやすくするかということがあった。結局、後者が選択された。これも記念出版として式典までに出版された。

『井上円了の教育理念』『井上円了選集』の刊行は、井上円了の研究史からみて、大きな功績をあげたと、現在では評価されるが、それを強力で推進したのは高木宏夫氏であった。

## 4 井上円了記念学術センターの設立

そういう形で創立100周年に、『井上円了の教育理念』という本が出て、それまで無かった客観的な資料にもとづく、新しい井上円了の理解、また、東洋大学の原点としての哲学館の創立者井上円了を提示したという意味で、関係者から新鮮に受け止められた。著述は新書版であったから、解り易く、エピソードを引きながら書かれていたことが、学内外の人々から評価をされたのであろうと考えられる。

しかし、創立100周年の時に、井上円了研究も10年を迎えて一定の成果をあげたことから、今後の研究の継続をどのようにするのか、という問題があった。その時に一方で、東洋大学100年史編纂室があった。100年史の編纂室と井上円了研究が、並行して進んでいたわけである。そこで問題が出たのであるが、井上円了関係は別に継続するという事で、井上円了選集等編集委員会というものを立ち上げて、『井上円了選集』を継続して作っていくことが決定されました。選集ではあるが、全集的なものにするという方針があったからである。

東洋大学100年史の方は、ようやく『図録 東洋大学100年』が終わって、記念品として配布されたが、それ以外は資料収集と整理段階で、執筆の段階に入れないという問題があった。そのため、遅れている100年史編纂室の業務と、井上円了関係の研究というのを、どのようにすべきか、組織のあり方の問題となった。最終的に井上円了研究関係の組織が吸収合併して、当時珍しかった法人立の井上円了記念学術センターを新たに設立したのが、平成2年のことであった。井上円了に関する専門的な研究機関が設立されたのである。

しかし、研究事業的には2年ほど足踏みをしたので、井上円了記念学術センターでは、100年史編纂にまず取り組んだ。遅れている問題点を洗い出し、体制を組み直して、100年史の編纂を優先した。と同時に、井上円了セ

ンターとしての研究も始めるために、新たに研究員を募集して、研究組織作りと活動を始めた。

井上円了センターでは、井上円了の業績を解り易く知ってもらうために、季刊雑誌の『サティア』を作り、アップデートな話題の原稿と、各教員の研究をエッセー化したものという一般的原稿の他に、必ず井上円了に関する原稿を1本掲載するようにした。執筆陣は学外が半分、学内が半分という形で、『サティア』という雑誌は1回に5000部印刷して、こういう形で井上円了の業績の認知を進めた。トップデザイナーの方が表紙などの編集に加わるということもあり、読者から関心をもって読まれたと聞いている。

こうして100年史の方は全8巻で刊行を終えた。それから、本格的に円了研究をスタートさせた。各研究員の成果を機関誌『井上円了センター年報』に掲載し、それとすでに紹介した『サティア』と、あとは井上円了に関する巡回展示会を年2回ぐらい行なった。

100年史が終わってから、新たに再開したのが『井上円了選集』の刊行である。この選集も学内に配布する一方で、全国の大学・短大に寄贈して、将来の井上円了研究の伸展に期待して行ってきた。結局、『井上円了選集』は全25巻で終了した。10年以上の編集期間がかかったのは、井上円了の著作が、例えば、哲学、宗教、倫理、心理、妖怪学、随筆・その他と、多岐にわたっており、現代人に使いやすい選集にするために、索引や目録などを付加したためである。こうして、昭和53年から東洋大学ではじまった井上円了研究は、30年以上にわたって継続され、現在では井上円了に関するテレビ番組の放映や新たな学外の研究者よる問題提起が出るようになって、井上円了の業績や人間像が社会的に認識されるようになってきた。

30年以上、井上円了研究に携わってきた私の個人的な感想では、昭和62年の100周年で提起された井上円了像からスタートしたが、現在では新たな人間・井上円了像がまとめられる研究状況に至ってきているのではないかと考えている。それは、初期の思想の解明などが進んできているからである。最近では外国人の研究者による本格的な井上円了研究が出るようになった。われわれ日本人には気づかなかった視点から、新たな井上円了が提起されるという、井上円了研究の国際化が進んでいる。そのことは、近代日本に大きな役割を果たした井上円了が改めて評価される時代に入ってきたことを示しているのだろう。